

1

朝食、済ませた。身支度、済ませた。授業の予習は……自信はないがやるだけやった。

(あとは)

テレビの右上に表示された時刻を確認する。そろそろか。開^{かい}佑^{ゆう}真^まはテレビを消すと鞆のベルトを肩にかけた。

自室を出て施錠し、しかしそのまま玄関へは向かわず隣室のドアをノックする。少しの間ののち返ってきたのは「うん」だか「ううん」だか、何ともはつきりしない言葉だった。

この時間のこのドアに鍵がかかっていることを、佑真はよく知っていた。ドアノブを握る。ゆっくり回す——回る。ああ、やっぱり。遠慮もせず上がり

込んで奥のベッドを見ると、案の定掛け布団がもぞもぞと動いていた。

「おーい起きろ、遅刻するよ」

声をかけるも。

「まだいける、まだ……」

この調子である。まったく、仕方ない。佑真は両手で掛け布団を掴んだ。一瞬息を止め、力を入れて思いつき引き剥がす。と。

「あつ、ちよつ……」

布団の下では制服を着た鳥原智輝^{とりはらともき}が身体を丸めていた。

「おはよう智輝」

「布団返して」

「駄目、もう出るぞ」

「えー」

「『えー』じゃない、起きて」

「佑真のケチ」

「ケチじゃない。つかケチ関係ない」

「何だよーもう」

唇を尖らせながら智輝が身を起こす。学ランに皺が寄り、頬にはシーツの跡がついている。こう言つては何だが、ちよつとみつともない。

「二度寝するなよつて言つたのに」

「俺はするつもりなかつただけど」

「けど、何」

「こいつが俺のこと誘うんだ」

優しく枕を叩く智輝の手を取る。床に転がつていた智輝のリュックサックを掴ませる。

「ほら、行くぞ」

「はい」

腕を引っ張ると遂に智輝は立ち上がり、リュックサックを背負つた。

今日もクラスメイトを部屋から連れ出すことに成功した。朝一番の任務を終え、佑真はそつと胸を撫

で下ろしたのであつた。

佑真の生家は県東に位置する小さな島にある。人口数百人程度の端島だ。当然子供も少なく、島内に小中学校はあつても高校はない。進学するには実家を出なければならなかつた。

家を出てまで学びたいことがあるか、そこまでする価値があるのか。当時まだ中学生だつた佑真にとって、十年以上先の将来を考えるのは容易なことではなかつた。しかし佑真の学業の成績は決して悪くならなかつた。母数が少ないから学内順位はろくに参考にならないが、全国共通テストでは悪くない——むしろそれなりにいい成績を残していた。そんな彼に教師が奨めたのは進学の道であり、この湊陵高等学校であり、学生寮での生活だつた。

佑真が海向こう出身なら、智輝は山向こう出身である。同じような理由で家を出ることになつた二人が仲良くなるまで、さほど時間はかからなかつた。

「どうせまた夜更かししてたんでしょ」

「おう、宿題を」

「やると見せかけて漫画読んでた」

「さっすが佑真、よく分かったな」

目を丸くする智輝に佑真は肩をすくめてみせながら寮の玄関を出る。目の前の道路を渡ればもう学校だ。寮の自室を出てから教室に入るまで、所要時間はわずか五分。遠くの自宅から一時間近くかけて登校してくる奴だっているのに、目と鼻の先の寮に住む人間が遅刻だなんて格好がつかない。

「智輝さ、ちゃんと起きろよ。遅刻とか恥ずかしいから」

「起きてたじゃん」

「朝ご飯食べてる間だけな」

「そのあと便所行った時も起きてた」

「聞いてねえよそんな話は」

ここへ入学して二年目。顔も名前も知らない他人

同士だった二人は、くだらない言葉も交わせる仲になった。何となく目配せして、どちらからともなく噴き出して、互いに小突き合いながら校門をくぐる。まっすぐ生徒玄関には向かわず運動部の部室棟へ行き、テニス部の部室を覗いて先輩たちに挨拶してからそこで靴を履き替え、自分たちの教室へ足を向けた。

日中授業を受けている間も、放課後部活に精を出す間も、佑真のすぐそばには智輝がいた。その上寮の部屋も隣同士で、智輝はしばしば佑真の部屋を訪ねてくる。訪問の理由は毎回様々だが、多いのは「部活の予定を確認させて」か「宿題の答えを教えて」か「テレビ見せて」あたり。特にテレビは、毎週決まった時間に必ずやってくる。

「ドラマ見に来た」

そう言う智輝は、佑真が何か言い返す前にテレビの前に座り、リモコンを操作し始めるのだ。